

---

# 遭遇、サンタと少年、屋上で

雨田豊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遭遇、サンタと少年、屋上で

### 【Nコード】

N6993C

### 【作者名】

雨田豊

### 【あらすじ】

サンタと少年はクリスマスの夜に『遭遇』する。だが、そのサンタはとても人をくった変人で……。

## （前書き）

警告。 本作品は変人サンタを描いたショート・ショートであり、正統派の夢あるサンタ像をお持ちの方々は読むことをお勧めしません。

「あんだ、こんなところでなにやってんだ？」

拓哉は学校の屋上で、フェンスによじ登っていた、サンタ服を着た男に言った。

「むお、見つかった!？」

男は足を滑らせて、尻餅をつく。が、すぐに慌てて立ち上がると、

「しょ、少年よ、わしはサンタクロースだ！　メリークリスマス！」

「見れば分かる。何でサンタが真夜中に学校の屋上にいるんだ」

「ホウホウホウ。そ、そうかプレゼントが欲しくて、わざわざ私を探しに来たのか。最近の若者にしては関心、関心」

「人の話聞けよ。何か焦ってないか？」

サンタは右手に持っている膨らんだ白い袋に手を入れると、

「何をいう。わしは『プレゼント欲しい子誰だ?』がここで反応してな、ちよつと探しに来ていた所だった」

黒光りする銃のようなものを出した。

「……それ何だよ」

「見てのとおり、『プレゼント欲しい子誰だ?』」

「ちよつと待て、どう見ても銃だから。笑いながらサンタがそんなの持つてると怖いから!」

「おお、反応しとる、反応しとる!」

サンタは銃を見たまま、クルクル回転し始めた。

（自分に反応してんじゃねえのか……って、もしかしてこいつ、いかれた危ない変質者で危険なオッサンかもしれない。……そうじゃないにしてもこれは本物のサンタとは言えない、変態だ）

「……仕事がんばれよ、じゃあな」

拓哉は満面の笑みを浮かべながら、さりげなくその場を去ろうと

した。

「ま、まさか君がプレゼント欲しい子だったとは！」

拓哉は走った。全力で。

が、

「ちょっと待つのじゃぞ、今プレゼント出すから」

サンタはいつの間にか、拓哉の前に立ちふさがっていた。

（な、なんで！？）

拓哉は冷や汗を流した。

サンタは先ほどの袋から、

「ほれ、プレゼント」

使い古された皮の四角い物体を取り出した。

「……なんだ、これ」

「財布じゃ。見てわからんのか？」

「ちよつと、見せろ」

拓哉は財布をサンタから取り上げて、中を広げた。

「って、これ田中先生の財布！？」

財布のカード入れに、妻と娘をはさんで幸せそうな笑みを浮かべる、担任田中の写真があった。

「ホウホウホウ。どうじゃ、現金で五万、その他色々おまけ付きじゃぞ」

「やっぱりお前、泥棒じゃないか！」

「ち、違う。偶然、鍵がかかった職員室の中で拾ったのじゃ」

「……警察呼んでもいいか？」

サンタは田中の財布を指差すと、

「あー、こんな所に誰かの財布が落ちてるぞ。そうじゃ、プレゼントのついでに、トドケテアゲヨウ。わしってグットサンタ！」

「いや、落ちてないから。しかも何かカタコトに聞こえるぞ」

サンタは急に真面目な顔になると、

「さて、冗談はここまでだな」

「おい、何でいきなりシリアスになってんだ。誤魔化されないぞ」

「拓哉。君こそ何でこんな時間に、学校の屋上なんかにいるのかね？」

拓哉は突然ふいを突かれて、ぎょっとしながら、

「あ、いや、僕はその……サンタさんを探しにきたんだ！」

サンタは溜息をついて、

「嘘、じゃよ」

「な、なんでわかるんだよ」

「姉の供養か？」

拓哉の姉は四年前、この屋上から飛び降りていたのである。それも今日、クリスマスにだった。

「……なんでだよ」

と、拓哉は言った。

「実は、拓哉のお姉さんにちと頼まれてな」

「え？」

サンタは白い袋をかさごそ探して、手の平サイズの小さな、ラッピングがかかった、リボン付きの箱と、一枚の便箋を拓哉に渡した。便箋には拓哉のよく見慣れた、ちぐはぐで読みにくい文字が書かれている。

「……ばか、やろう」

拓哉の頬から、空から降る雪よりも寂しい粒が便箋に落ちた。

”クリスマスプレゼント、遅くなってごめんね　姉さんより”

「お前さんの姉さんはあの世で楽しくやっておったぞ」

と、サンタは言った。

その言葉が拓哉にはなにより嬉しかった。

「そうか」

と、拓哉は泣きながら微笑んだ。

ふと、拓哉はあることを思いつくと、

「あんた、あの世に行けるのか？」

と、拓哉は涙を腕で拭って言った。

「ホウホウホウ、わしを誰だとおもっとる。天下のサンタクロース

じゃ。宇宙の果てだろう異世界だろうと、どこでも行けるぞ」

「じゃあ、姉さんに伝えて欲しい　僕も楽しくやってるから、って」

「サンタクロースの名に誓って、伝えよう」

と、サンタは肯いた。

瞬間、サンタの目の前に、縄はしごがすつと降りてきた。サンタは白い袋を肩にかけ、縄はしごにつかまると、

「ホウホウホウ、縁があればまた会おう！　メリークリスマス！」

と、拓哉に笑顔を向けながら、縄はしごがゆっくりと上へ登っていく。

拓哉はサンタが見えなくなるまでずっと、白い粒がちらつく夜空を眺め続けた。

「メリークリスマス」

と、拓哉は小さく呟いて屋上から去る。

拓哉が教師田中の財布がないことに気が付いたのは、それから二十六時間後だった。

（後書き）

こんなサントイたらおもしろいだろうな。

それを考えて書きました。ちよつと、勢いで書いた部分があり、むちやがある箇所があると思いますが、どうかご了承してください。  
（なんの了承だか）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6993c/>

---

遭遇、サンタと少年、屋上で

2010年12月12日19時01分発行